
天空の姫君

柊ライヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空の姫君

【Nコード】

N3914Z

【作者名】

柊ライヤ

【あらすじ】

『一緒に来ないか？』

旅先で偶然出会った少年はそう言った。
護るべき国を失った青年は、ひょんなことから個性豊かな一行と旅路を共にすることとなった。

『俺の、故郷なんだ』

過去、現在、未来。
芽吹いたばかりの新たな絆。

『お前に、聞きたいことがある』

疑惑。

彼らの旅の目的とは一体何なのか。
少年は何者なのか。

『どういふことか、説明してくれるな？』

真実を知った青年の決断は――。

『あなたは、分かっているんでしょう？』

『許さない……!!』

『迎えに来るから……』

『俺を信じろ』

『イヤアアア!!』

『古いんだよ、剣なんてもんは』

『愛してよお!! あたしを愛して!!』

『これは、想定外ですね』

『あああああ!!!!』

『よく、できました……』

『あんたはこれからどうするの?』

冒険ファンタジー、開幕——。

（序章）

かつて、その大陸には3つの大国が存在した。

平和主義を掲げた聖シユナル王国とランデイス王国。自然豊かな国土を持つ二つの国は、互いに友好同盟を結び、円満な外交関係を築いていた。国土防衛の為の軍事力は必要最低限に留め、しかし有事の際には二か国の総力を結することを誓い合っている。平時は実に穏やかな、それこそ平和の象徴たる国風は、各国を治める領主の人柄ゆえなのだろうか。

そして、その二つの国と隣り合わせに在ったのが、アルカデルト帝国であった。国土の2／3を砂漠に覆われたその国は、他の二国とは明らかに、主義主張も国風も異なっていた。その軍事力は他国の全勢力に等しく、ゆえに対立することもしばしばだった。しかし、平和主義国間で交わされた同盟条約のおかげで、長年に渡り大戦に見舞われることもなく、世界の均衡はこのまま保たれるはずだった。

大陸歴419年、突如としてその均衡が音を立てて崩れていく。軍事国家アルカデルト帝国による、国境侵攻――。

幾年月を掛けて密かに増強させられた圧倒的な軍事力は瞬く間に勢力を拡大し、他国を侵略していった。同盟条約の名の元に、平和主義国の連合軍は国土防衛の為に応戦する。

しかし決死の抵抗も虚しく、大陸歴422年、ランデイス城陥落。王国はついに滅亡の一途を辿ることとなる。

程なくして、大陸歴423年、国を治めてきた女王暗殺と共に、聖シユナル王国は降伏宣言を発表。アルカデルト帝国に占領、統合されることとなった。

あれから7年余りの月日が経ち、大陸の大部分は帝国の支配下にあった。かつてのランデイス王国国境に位置する森は魔物の棲みか

となり、手に余った帝国はそれを放棄。大戦の傷跡そのままに、王国はいっしょに死都と呼ばれるようになっていた。

一方、降伏宣言を受諾された聖シユナル王国は、統合とは名ばかりの一方的な支配下に置かれていた。降伏後、帝国側から発表された女王とその娘の死亡と言う事実は、大戦に疲れきっていた人々を更に追い詰めることとなった。そして新たな帝国王として戴冠式に姿を現した人物に、旧王国民の哀しみは憎しみへとその姿を変えていった。

大戦が終わってもなお、各地で小さな紛争が起こり、旧王国民の帝国に対する反発は、圧倒的な軍事力の前にことごとく潰され、人々は逃げるように地下へと身を潜めていった。

誰もが希望を失い、それでも生きる為に築き上げた地下都市で小さな幸福を見出だし始めていた時である。まことしやかに囁かれ始めた噂は大きな波紋を呼び、瞬く間に地下都市中へと広まっていく。

『死んだはずの皇女様が生きている』――。

人々の目に、光が戻った瞬間だった。

（勘違いから始まった）（1）

王都クルスメラー……。旧聖シュナル王国のかつての都は、今日も人々の喧騒で賑わっていた。中心部から広がるレンガ造りの街並みは、かつて栄えた一国の名残であろうか。

暖かみのある色彩をした建物の間を行き交うのは、華やかな衣装に身を包んだ貴族の方々、我が物顔で道の真ん中を闊歩するのは厳つい鎧が一際目につく帝国軍人である。軒を連ねる商店に陳列されるのは、どれも高値の商品ばかりだ。店先でふんぞり返る店主とおぼしき者達も、そこそこ値の張るであろう装飾品を身に付けていた。さぞ豊かな暮らしを謳歌しているのであろう。

しかしながら、彼らは旧聖シュナル王国の民ではない。帝国により統合された後、本国より移住してきた、アルカデルト帝国民である。

ならば旧王国民かというと、街の片隅に数ヶ所、帝国民は決して近付かない出入口がある。王都を警備する軍人も、決して足を踏み入れようとしなない場所だ。地下へと続く階段を降りれば、そこにはもうひとつの都市が存在していた。元は貯蔵用、避難用として設けられていたその空間で、彼らは帝国から身を隠すように生活を始めた。いつしかそれは、ひとつの街として形作られていったのである。始めこそ、絶望に打ちひしがれ生きる気力さえも失ってしまったかのようにだった人々も、元々の国民性がそうさせたのか、地上の賑わい以上に活気付いていた。

そんな地下都市に、一人の青年が降り立った。遠くからでもよく目立つ赤い短髪の青年は、煙草をくわえたまま後頭部を掻いた。

「なんか俺、迷ったっぽくね？」

青年——ゼル・クロードは誰に問い掛けるでもなく言葉を発した。しかしそれは、吐き出した紫煙と共に消えていく。

一度立ち止まって辺りを見回せば、ついさっき道を尋ねたばかりの露店の店主と目が合った。気まずい。互いに愛想笑いを浮かべはしたが、居心地の悪さにさっさとその場を後にした。

「絶対迷ってるわー」

諦めにも似た苦笑いを浮かべながら、ゼルは躊躇なく歩を進める。入り組んだ道と似たような風景が、彼の方向感覚を完全に狂わせてしまったらしい。もはや自分が街のどの辺りにいるのかさえも分からなくなってしまうた。

「どーするかねえ」

適当に歩いていたら、見たことのない場所に出てしまった。賑やかだった雰囲気嘘のように、辺りは静まり返っている。

乱雑に積み重ねられた物資輸送用のコンテナは、埃を被ったままそこら中に転がっていた。地下都市の端にあたるのだろうか。その先に道は見当たらない。錆び付いた格子状のフェンスが中途半端に開かれているだけであった。

「とりあえず戻ってみるか」

楽観的な苦笑いを浮かべたまま、ゼルは元来た道を引き返そうと踵を返した。無事に地上に出れるのかさえ疑問だったが、いつまでもこの突き当たりにいるよりはましだろう。

鼻唄混じりに一步踏み出したゼルだったが、一人増えた気配に反射的に身を隠した。壁を背にして辺りを窺う。

「子供……？」

程なくして現れたのは、ダークレッドのショートヘアをした小柄な人物だった。黒地のロングコートに施された真っ赤なラインが印象的だ。その腰元には、東方の国が由来とされる片刃の剣が携えられていた。長さの違う二つのそれは、互いにぶつかり合って音を立てた。

子供と言うには大人びた、しかしまだ幼さの残る少年は、辺りを注意深く窺うとゆっくりとフェンスに手を掛けた。

錆びた金属が軋む音が、静かすぎる空間に不気味に響き渡った。

「まだ続いてんのか？」

行き止まりかと思われた空間から、少年は姿を消した。もしかしたらそこから地上に出れるかもしれないと、ゼルは見知らぬ少年の後を追うべく駆け出した。無造作に散らばるコンテナを避け、少年の消えたフェンスの向こう側へと足を踏み入れる。

「これはまあ、なんというか」

彼を出迎えたのは、地上にへ続く登り階段でも降り注ぐ陽の光でもなかった。

（勘違いから始まった）（2）

吹き上がってくる風が、彼の髪を揺らした。黒のジャケットにデザインされたいくつかの小さなベルトのバックルが、ボタンに跳ね返って小さく鳴る。

視界に飛び込んできた光景に、ゼルは思わずため息を吐きたい衝動に駆られた。そこに現れたのは、更に地下へと続く下り階段である。明らかに地上には出られそうにない。

「どうすっかなあ」

こうしている間にも、階段を降りる少年の足音は、一定のリズムを刻みながら遠ざかっていく。

「行ってみるか…」

万が一の時はあの少年に道を尋ねればいいだけのこと。ゼルは意を決して階段を降り始めた。

なるべく足音が響かないように配慮しながら、しかし少年の足音を見失うことのない速度で進んでいく。

下へ降りれば降りる程、冷やされた空気が水滴となって辺りに滴っていた。足元にうつすらと広がっていた水溜まりが、ゼルのブーツの重みでピチャリと跳ねた。

「どこまで続いてんだ？」

壁に沿って一定の間隔で灯りが灯されているところを見るに、全く人が足を踏み入れない場所という訳ではなさそうだ。現にあの少年は、当たり前のように足を踏み入れている。

小さな灯りが照らす薄暗い空間に、二つの足音だけが響いていた。そもそもあの少年は、こんな場所に何の用があるのだろうか。一見したところ、帝国の人間ではなさそうである。かといって、地下の住人というわけでもなさそうだ。着ている衣服には目立った汚れもなく、埃にまみれている様子もない。しかしながら、彼の姿を目標撃したのはただ一度きりだ。それも薄暗い中で一瞬だけである。黒いロングコートの汚れなど、はなから目に付かなかったただけなのかもしれない。

ふと気が付くと、規則正しかった足音がひとつだけしか聞こえてこない。

「やっべ」

ゼルは慌て駆け出した。こんな場所で迷子になっただけなら人たまりもない。残りの段数を二段飛ばして駆け降りる。最後の段から飛び降りると、そのまま通路が繋がっていた。少し先の曲がり角で足元の水溜まりに滑りはしたが、転けることなく先へ進む。

「うお?!」

角を曲がった瞬間、狭かった視界が急に開けた。かと思うと、どこからか水が流れる音が聞こえてくる。

「地下水路ってところか？」

ゼルは辺りを見回しながら、思わず止まってしまった足を踏み出した。見渡す限り一面、精巧に造られた水路はどこまでも広がっている。おそらく王都の地下全域に張り巡らされているのだろう。

「こりやすげえや」

今は無き聖シュナル王国の技術力の高さが窺える。

数歩進んだところで、ゼルはもう一度、ゆっくりと辺りを見回した。少年の姿はどこにも見えない。完全に見失ってしまったらしい。

「引き返すか…」

前方には出口の見えないただっ広い地下水路、後方にはまだ己の駆けてきた通路が見えている。幸いにも、今来た道は一本道だ。

ゼルは迷うことなく後者を選んだ。少しでも地上に近い方が、何かと安心である。少年の行方が気にはなったが、彼は通路に向かって踵を返した。

（勘違いから始まった）（3）

あと少しで狭い通路に差し掛かろうというところで、彼の耳に水の跳ねる音が届いた。背後から聞こえたそれに、反射的に身を翻す。

「っな！！」

視界に捉えたのは、煌めく短刀の刃だった。相手の表情は見えない。短刀を握る右手が、顔の前を横切って左上に構えられていた。右上から斜めに降り下ろされた刃を、間一髪のところ避ける。しかしそれを見越していたかのように、バランスを崩したゼルの右肩に体重が掛けられた。相手の勢いと重力に従って、彼の体は後ろに傾いていく。

「っ！！」

大して受け身も取れないまま、ゼルは床に背中を打ち付けた。それと同時に胸にのし掛かってきた重さで一瞬呼吸困難に陥る。

攻撃を仕掛けてきた相手は自分の上に馬乗りになったまま、再び短刀を振りかざした。

「（ヤバイ！！！！）」

最悪の結果を覚悟した瞬間、鋭利なそれは己の頬すれすれを掠め、地面へと突き立てられた。

「お前、何者だ。俺に何か用か？」

低くもなく高くもない声色が響いた。発したであろう人物を確認したゼルの目が見開かれる。

突如として己に攻撃を仕掛けてきたのは、この場所に辿り着くきっかけとなった少年だった。

「お前、さっきの」

「質問に答えろ！見たところ、この辺の者じゃないようだが？」

少年の黒い瞳が妖しく煌めく。返答によっては、このまま人生の終わりを迎えることになるだろう。その証拠に、突き立てられた短刀が少しだけ傾く。

「ちよちよちよ、待て待て待て！！」

冷や汗が伝う。慌てたように、ゼルは必死にまくし立てた。

「俺迷子になってただけだから！！道に迷っただけだから！！」

少年は何も言わない。ゼルの言葉を疑っているのか眉根を寄せたまま、その目はじっと彼を睨んでいた。

「マジで！！ホントだって！！」

「彼の言っていることは本当ですよ、アル」

突如声が響いた。明らかに第三者のそれは、控え目な足音と共に近付いてくる。

視線だけで様子を窺えば、白と淡い緑色を基調とした神官のローブを纏った人物が映った。下の方で緩く纏められた深緑色の長い髪

が、歩く度にふわりと揺れた。

「だけどフェリクス……!!」

アルと呼ばれた少年は、現れた人物に反論する。

「大丈夫ですよ。だからそろそろ退いてあげなさい？」

やんわりとした口調で、フェリクスはにこりと微笑んだ。

一瞬躊躇したものの、胸に掛かっていた重みがフワリとなくなる。少年が立ち上がったのだ。申し訳なさそうに、彼はゼルに背を向けてしまった。

「ありがとう。助かったよ」

図らずも命の恩人に、ゼルは素直に頭を下げた。

「いえいえ。元はと言えばこちらが勝手に仕掛けたのですから。私はフェリクス・バルバートルです。以後お見知り置きを」

差しのべられた手にいくつも連なる金の腕輪がしゃらんと鳴った。

「あんた、目が……？」

その手を取ろうとしたゼルだったが、フェリクスの表情に動きが止まる。

優しい笑みを浮かべるその瞳は、光を映してはいなかった。灰色の視界には何も捉えられてはいない。

「昔ちよつとありまして」

困った様に眉を下げたのは、これ以上踏み込むなということだろうか。

「そうか…俺はゼル・クロードだ。よろしく」

早々にその話題を切り上げると、ゼルは差し出された手を取った。見た目の割にはしっかりとした大きな手は、フェリクスが男であることを物語っていた。

「アル」

フェリクスが少年の名を呼ぶ。彼の言わんとすることを理解しているのか、少年はふてくされたようにそっぽを向いたままだ。

「…ル」

「え…?」

小さな呟きを聞き逃すまいと耳をすませば、少年はくるりところらに向き直った。

「アル…アル・グレイだ」

「アル、よろしくな」

握手を求めた手を、彼は素直に握り返した。少年にしては小さくしなやかな指先に、もうしばらく握っていたいと思いつながらも、ゼルは名残惜しげにその手を離れた。

「わ、悪かったな…」

伏し目がちに呟いたアルは、きっと根は優しいのだろう。ゼルはにかつと笑うと、彼の頭をわしゃわしゃと撫でた。自分のそれより暗い髪は、細さのせいかな少し絡まる。

「ま、こっそりつけてた俺も悪いしな、気にすんな！」

普段頭を撫でられることがないのか、少し気恥ずかしそうにアルは絡まった髪を撫で付けた。

その視線がふと、ゼルの腰にぶら下がる大剣へと向けられた。よく手入れの行き届いたそれは、きつと長年愛用しているものなのだろう。そのちょうど鰐に当たる部分には、掠れてしまっただけだが、何かの紋章が刻まれていた。

一瞬の沈黙の後、彼はおもむろに口を開いた。

「その、さ…もしもだな、お前さえよかったら」

地面を泳いでいた視線が止まる。ゆっくりと顔を上げた少年の瞳は、何かしらの決意を秘めているようだった。

（勘違いから始まった）（4）

「一緒に来ないか？」

少年の口から発せられたのは、予想だになかった一言だった。これには連れのフェリクスも驚きを隠せない。

「べ、別に深い意味なんてないんだからな！お前も旅してるみただし、一人よりはみんながいた方が楽しいかなって思っただけで別に強制とかそんなんじゃないし！行き先が決まってないならって話だけで、何て言うかその…」

一息で一気に捲し立てられた言葉は、だんだんと尻すぼみに小さくなっていく。最終的には、アルはまたそっぽを向いてしまった。

「いいよ？」

思いの外意地っ張りなアルの様子に笑みをこぼしつつ、ゼルはあっけらかんと返事をした。正直断られるだろうと思っていたアルは、思わず彼を振り返った。

「どうせ放浪の身だしな」

歯を見せて笑うゼルに、それまで強張っていたアルの表情が少しばかり和らぐ。

「本当に良いのですか？我々の旅には危険が伴いますよ？」

心配そうに尋ねてきたのはフェリクスだった。もとより危険は承

知の上である。ゼルは快く返すと、再びにかつと笑った。

「行くか」

どちらからともなく歩き出した。向かった先は、地下都市へ続く階段だ。

「そういえばゼル、通行手形はお持ちですか？」

最後尾に行くフェリクス問いに、彼は苦笑いを浮かべた。言いくさそうに開かれた口からは、二人の予想通りの言葉が返ってきた。

「あー、俺、密入国☆」

お茶目を装って発言したものの、一瞬沈黙に包まれる。

「ま、帝国の人間じゃなきゃ、持ってなくて当たり前だな」

どこからか聞こえたため息はアルのものだった。それには気づかなかった振りをして、ゼルは乾いた笑いをこぼした。

アルカデルト帝国により大陸が統合されたとは言っても、まだまだ支配下でない街はいくつか存在している。当然その境界には関所が設けれ、手形なしでは出入国は不可能なのである。

しかし、地下へと追いやられた彼らに帝国が手形を発行するはずもなく、聖シユナル王国の住民達は、実質地下での軟禁状態だった。

「ま、なんとかなるさ」

振り返ったアルの表情からは、先程までの警戒心は消えていた。

その事に安堵しつつも、密入国を繰り返す事へのリスクに頭を抱えた。長年旅をして来たゼルだったが、密入国を犯したのは王都クルスメラが初めてなのである。それまでは死都付近の無法地帯を放浪していたため、通行手形の必要性に迫られなかったのだ。

「（こりゃ、意外と刺激的な旅になりそうネ…）」

いつの間にか、一行は地下都市へ出ていた。アル達にとっては勝手知ったる土地なのだろう。その歩みに迷いはない。幾度もこの街で迷子になっていたゼルは、ただ彼に着いていくしかなかった。今ここではぐれたら、確実に数分前の二の舞である。

「どこに向かってんだ？」

彼らの行き先が気になったゼルは、単刀直入に尋ねた。

「内緒☆」

人差し指を唇に当てて振り返ったアルは、楽しそうに笑っていた。

く勘違いから始まったく (5)

「ここだ」

程なくして、アル達は一軒の民家へと到着した。木材を組み合わせただけのトタン屋根のそれは、入り組んだ路地の先にひっそりと佇んでいる。

「さ、入りましょう」

先陣を切ったフェリクスの金のロッドが、カツンと床を鳴らした。古ぼけた木戸が、軋んだ音を上げる。擦れた木屑かパラパラと宙を舞った。

「おやおや、誰かと思えば」

出迎えてくれたのは、背の低い老婆だった。曲がってしまった腰が、彼女をさらに小さく見せている。

「ごきげんよう、ミセス・ノリス。フルールさんはご在宅ですか？」

フェリクスの言葉に、ミセス・ノリスは無言のまま、これまた皺だらけの細い手を伸ばして部屋の奥を指差した。小さな家には不釣り合いなほどに大きな食器棚がそこに鎮座していた。

「ありがとうございます」

終始笑みを絶やさないフェリクスの後ろを、アルとゼルは黙って

着いていく。狭い部屋の奥、入り口からは決して見えない位置にひっそりとある扉へ向かう。

室内にはインクのおいが充満していた。壁や床の所々には、インクが飛び散ったのだろう黒いシミができている。

その部屋の中央に、ひとつのテーブルが備えられていた。使用済みの羊皮紙が所狭しと散らばるそこに、一人の男がいた。グレーの髪が無造作に遊んでいる彼の左目は、眼帯に覆われている。

「おやあ？こりゃビックリだ。今日はどうしたん？」

やけにのんびりとした口調で、彼はにこやかに首を傾げる。

「仕事の依頼ですよ、フルールさん」

フェリクスは小さな紙を取り出す。綺麗に二つに折られたそれを、フルールはゆっくりと受け取った。開いて中身を確認する。一瞬だけ、彼の目付きが変わった気がした。

「そこに書かれている人数分」

いつになく真剣さを増したフェリクスの声が、やけに室内に響いた。

「通行手形を、作っていただきたいのです」

「（偽造か…？）」

「あいつは、その手のプロだよ」

ゼルの考えに答えるように、アルは小さく呟いた。

「参ったねえ…」

フルールが困ったように息を吐いた。その目はじっと、手渡された用紙を見つめている。

すると、それまでフェリクスの後ろに隠れるようにしていたアルが前へ出た。

「お願いします。どうしても、それが必要なんです」

深く深く頭を下げる。それだけで、彼らがどれだけ必要に迫られているのか分かるようだった。

アルはゆっくりと顔を上げる。ゼルの位置からでは、彼の表情は分からなかった。しかし、フルールの顔が驚愕の様相を呈した後、どこか嬉しそうな表情へと変わる。

「…シルヴィアの娘さんの頼みなら、断れんね」

口の中だけで小さく呟かれた一言は、誰一人として聞き取ることはない。

フルールは後頭部をわしゃわしゃと搔いた。

「人数分、すぐにでも用意しよう」

「ありがとうございます！」

フルールからの承諾の言葉を受け取ったアルは、満面の笑みで元いた場所へ戻ってきた。その表情に、思わずゼルの口元も綻ぶ。

「どのくらいで出来そうですか？」

「そうさねえ…」

頭で計算でもしているのだろうか。フルールの目線は斜め上を泳いでいる。

しばらく悩んだ末に目処がついたのか、彼はにこりと微笑んだ。

「街を一周して旅支度でも整えてきたらええよ」

「え…？」

飛び出してきたのは、一行に対する提案だった。具体的な数字が示されると思っていた彼らは拍子抜けしてしまう。

それには構わず、フルールは言葉を続けた。

「ここへ戻ってくる頃には、出来とると思うよ？」

「そんなに早く…！？」

つい言葉にしてしまった。正直なところ、公式文書の偽造をするのだからもっと日にちを要すると思っていたのだ。それを彼は、たったの数時間でできると言っているのだ。驚くという方が無理である。

「俺を、誰だと思っとるの？」

そう言った彼の顔は、どこか自信に満ちていた。

（勘違いから始まった）（6）

すぐにでも作業を始めると言うフルールを残して、アル達は彼の部屋を後にする。戻ってきた部屋では、小さな暖炉の前に腰掛けたミセス・ノリスが、ゆっくりと自身の足を擦っていた。

「話は終わったのかい？」

こちらを振り返ることなく、彼女はそう言った。フェリクスが礼を言っていると、彼女はようやく体をこちらに向けてくれた。

「先生、ちょっといいかね？」

フェリクスのことを『先生』と呼ぶ地下の住人は少なくない。彼女もその一人だった。

「どうしました？ ミセス・ノリス」

ゆっくりとした足取りで彼女の元へ歩み寄ると、フェリクスは椅子に座る彼女を見上げるように方膝を付いた。

「最近足が重たくてねえ。こうして暖めていないと、時々すごく痛むんだよ」

ミセス・ノリスはため息を吐いた。

「失礼しますよ」

フェリクスはそう言った後、彼女の細い足に手のひらを近付ける。

触れるか触れないかの位置で、彼の手はゆっくりと彼女の足のラインをなぞっていった。

「だいぶ弱っていますね。少し回復しておきましょう」

フェリクスの手が、淡いオレンジ色に包まれる。暖かみのあるそれは、ミセス・ノリスの足を包み込むように広がっていった。

「フェリクスは魔術師なんだ」

「まじでか」

彼の魔術を初めて目の当たりにするゼルに、アルはそつと解説する。

「たまにこうやって、街の人を癒してるんだよ」

「あーそれで『先生』な訳ね」

納得したように、ゼルは何度も首を縦に振った。

「どうです？少しは楽になりましたか？」

「んーだいぶ軽くなったよ。ありがとうねえ、先生」

足の痛みが消えたのだろうか、先程まで強張っていた彼女の顔が、少し優しくなったような気がする。

「ミセス・ノリス、少し外を歩く習慣をつけましょう」

フェリックスの提案に、和らいでいた彼女の眉間に皺が寄る。それは、あからさまに嫌悪感を示していた。

「絶対に嫌だよ。外にや帝国兵がいるんだ。あたしゃ絶対に出不いよ」

ミセス・ノリスはふいっと顔を背けてしまった。

「大丈夫ですよ。地下には帝国兵はいませんから。少し散歩をしましょう?」

フェリックスは優しい笑みのまま、彼女に語り掛ける。それでもミセス・ノリスは、首を縦に振ろうとはしなかった。

「……本当に、帝国兵はいないんだろうね?」

疑うように発せられた一言に、フェリックスは大きく頷く。

「考えておくよ」

顔を逸らしたまま、彼女はそう言った。その言葉に満足したのか、フェリックスは立ち上がると、成り行きを見守っていたアルとゼルを連れて家を出た。

「あの婆さん、ちゃんと外に出れるのか?」

歩きながらゼルは、フェリックスに尋ねた。見るからに頑固そうな老婆が、簡単に他人の言うことを聞くだろうか。

「心配ありませんよ。我々が戻る頃には、彼女は出掛けてますか

ら」

笑みを崩さぬまま、彼はそう断言した。根拠は分からなかったが、なんとなく、フェリクスが言うのならそうなのだろうと思ってしまふ。

「んじゃま、フルールの言う通り旅支度でもしますかね」

「どうせ迷うんだから先頭を歩くなよ」

「お前失礼な奴だな、おい」

意気揚々と先陣を切ろうとしたゼルだったが、アルの一言で出鼻を挫かれてしまう。立ち止まってしまった彼の横を、アルはすたすたと追い抜いてしまった。

「俺は方向音痴なわけじゃねーぞ」

「ハイハイ」

反論してみるものの、アルから返ってきたのは彼の言葉を全く信用していないような気の抜けた声だった。確かに、現に迷子になっていた前科があるだけに否定はできないのだが、それは入り組んだ街並みのせいだと言い訳してみた。

「ゼルー、置いてくよー？」

「こら待て」

立ち止まっている間に、二人との距離が開いてしまった。振り返

って自分と呼ぶアルが、少しだけ楽しそうに笑っている気がした。

「勘違いから始まった」(7)

旅支度を整え終わった頃には、フルールの言う通り偽造した通行手形は完成していた。

表紙には上質な牛皮が使われている。二つ折りになったそれを上下に開けば、本物と見間違えうほどに精巧な手形が現れた。一人ひとりの名前が丁寧な文字で刻まれている。左側半分には、前もって準備していたセピア色の顔写真が貼り付けられていた。

現在の人数より多いその理由を問えば、次へ向かう街で仲間が待っているのだと言う。どんな者達か尋ねるより先に、会うまでのお楽しみだと言われてしまった。

「(アルって意外とお茶目サンなのね)」

出会ってまだ1日と経っていなかったが、なんとなくアルの性格が見えてきた気がした。

「地上に出るんじゃないのか？」

てっきり正規のルートで出国するのだとばかり思っていたゼルは、念願の登り階段をあっさりと通り過ぎた二人に声を掛ける。

「上には帝国の人間がわんさかいるんだぞ？ わざわざそんなところに出たくない」

「は？ じゃあどうやって……？」

戸惑うゼルをよそに、アルは先へ進んでいく。

「ついてくれば分かりますよ」

微笑んだフェリクスに背中を押され、ゼルは言われた通り黙って着いていくことにした。

次第に、まだ記憶に新しい景色が広がっていた。埃を被り、無造作に積み重ねられた運搬用コンテナ、錠の壊れた錆びたフェンス、そして水音の響く下り階段が目の前に現れた。それは紛れもなくアルと初めて出会った、地下水路へと続く階段だった。

「下あ!？」

驚きのあまり、思わず声も大きくなる。しかしアルは、煩いと言わんばかりに一步踏み出した。

「本気でこんなとこ抜ける気かよ」

慌てて彼の後を追う。水溜まりが跳ねた。

「なあ、どうして旧王国民が、あれだけの生活水準を保ってるんだと思う？」

「え、どうしてって……」

言われてみれば確かにそうだ。地下都市に軟禁状態と言っても、彼らはそこまで生活に困窮しているようには見えなかった。砂ぼこりにまみれてはいても、その服は決してボロ布というわけでもなく、商店には様々な食材が並んでいた。偽造手形に使用された牛皮や羊皮紙にしても、地下では決して手に入らない代物である。

「帝国は、地下水路の全体像を把握できてない。当然、入り口が

地下都市にあることも」

「つまり……王国民はここから出入りしてるってことか！」

ゼルの言葉に、アルは満足そうに頷いた。

すでに階段は降りきった。目の前にひろがるのは、終わりの見えない広大な水路である。

「だからって、こんなとこどうやって」

いくつもの水門と入り組んだ水路、見渡す限り続く同じような景色に、恐らく方向感覚は当てにならなくなるだろう。そしてこんなところで迷ったが最後、二度と外には出られない気がする。それを彼らは、見取り図なしで抜けると言うのだろうか。正直言って無謀だった。

しかしアルは、躊躇なく前だけを見つめている。

「これだけの代物、一体誰が造ったと思ってるんだ？」

「え……？」

振り返ったアルの表情は、どこか誇らしげであった。

「聖シュナル王国。俺達の国だ！」

く勘違いから始まったく(8)

じめじめと薄暗い地下水路を、ただひたすら前だけを見て進んだ。半日ほど歩いただろうか。微かに潮の匂いが漂ってきたかと思うと、目の前に小さな梯子が姿を現した。

水滴の滴るその梯子を、滑らないように慎重に登っていく。上に行くにつれて周囲の壁が迫り、最終的には人が通れるほどの空洞になっていた。

「そこ開けて」

先頭を任されたゼルは、言われた通りに行く手を阻む石の蓋を押し上げる。丸く形取られたそれは、いとも簡単に動いた。周囲を警戒しながら恐る恐る外に出る。アルとフェリクスも後に続いた。食糧庫だろうか。列を成す木製の棚には、ありとあらゆる食材が並べられている。

「着いた着いたー」

パタパタと服に付いた埃を払う。どこからか、賑やかな音楽や話し声が聞こえていた。

「どこだ？ここ……」

「とある親切的な酒場の食糧庫☆」

「まんまじゃねーか」

細かいことは気にするなどでも言いたげに、アルは食糧庫のドア

を開けた。美味しそうな匂いのする厨房を抜ければ、恰幅の良い男達が集う酒場だった。アルコールの匂いが充満するそこを足早に通る抜け、外へと繋がる扉を開ける。

久方ぶりの太陽は、眩しかった。

一段と濃くなった潮の香りを肺一杯に吸い込む。目の前には広大な青空と大海が広がり、真っ白な壁の建物が、街をさらに明るく見せていた。行き交う人々も、まさに海の男達と言わなければならない。多い。

「港町マルハート。比較的、王国に友好的な街です」

全く説明する気のないアルを見かねたのか、さりげなくフェリクスが口を挟んだ。

海岸線に形成されたこの小さな街は、帝国の支配を受けていない。出入りするのには海賊や漁師、珍しい品物を求めて集まった商人がほとんどだ。その証拠に、商店には異国の品がよく目につき、街全体が活気に満ち溢れていた。

「二人はノエルとシエルを捜してきてください。私はベアトリスを捕獲してきます」

「はいはい。ゼル行こう」

「お、おう」

笑顔で手を振るフェリクスに別れを告げ、一行は二手に別れることとなった。海沿いの道を、のんびりと歩いていく。いくつも並んだ露店には新鮮な魚介類が並び、威勢の良い掛け声が飛び交っていた。

その中でも一際大きな人ばかりがあった。露店ではなさそうなそれは、時折大きな歓声に包まれる。

「いたいた、たぶんあれだ」

隣を歩いていたはずのアルが、急に手を取って早足になる。他人と手を繋ぐなど、何年ぶりだろうか。男にしては思いの外小さな手の温もりを感じながら、ゼルは導かれるまま彼についていった。

人だかりの中、観衆の視線を独占していたのは道化師の面を着けた二人の子供だった。銀色の髪を風になびかせる。それぞれ群青色と桜色のノースリーブのチャイナ服に、真っ白なズボンがよく映えていた。

桜色の子供は長い銀髪を後頭部で団子状にしている辺り、恐らく女の子なのだろう。反対に、群青色の子供は男の子である。

足首できゅっと締まった少し大きめのズボンを纏った少年が、大きなボールの上に飛び乗る。それを真似るかのように、足のラインに沿った、ぴったりとした半ズボンの少女がもう片方のボールに飛び乗った。器用にバランスを取りながら、彼らはポーズを取る。

「すげえ、大道芸か！」

不安定な足場で次々に技を披露する小さな道化師に、ゼルの心も踊った。この場にいる全員が、彼らに見入っている。ふたりが跳ねるたびに、アシンメトリーに伸ばされた前髪が揺れる。少女は左側を桜色のリボンで、少年は右の前髪を群青色のリボンで一房結び、先に付けられた小さな鈴が控えめに音を奏でる。

即興の舞台は、ひとつのボールの上で、少年の上に少女が乗るという大技で締め括られた。大きな歓声と拍手はしばらく止むことはなかった。

く勘違いから始まったく(9)

人だかりから離れ、アルとゼルはぼんやりと海を眺めた。絶え間なく続く波の音が、二人の心を落ち着かせてくれる。

「(……結構綺麗な顔してんのな)」

ふと視界に入ったアルの横顔に、ゼルは一瞬目が離せなくなる。男にしてはキメ細やかな肌に、ふっくらとした唇。漆黒の瞳に何を映しているのか、ただひたすらに、彼は水平線を見つめていた。

傾き始めた太陽が、全てを夕焼け色に染めていく。白壁に反射したそれは、街をオレンジ色に染め上げた。時間が、ひどくゆっくりと流れている気がした。

「なに見てんだよ」

「やー、仲間捜しに行かなくていいのかなーと」

急に声を掛けられ、ゼルの肩が小さく跳ねた。まさか気づかれてないとも思っていたのだろうか。出てきたのは当たり障りのない質問だった。

「もーすぐ来るよ」

言い終わるか否かの内に、遠くから小さな足音が聞こえてきた。こちらに向かってくる駆け足にアルは体を反転させる。つられるように、ゼルも足音の聞こえる方を振り返った。

「アル！おかえりなさい！」

飛び込んできたのは桜色の少女だった。

「ただいま、シエル」

アルの言葉に顔をあげた少女は、嬉しそうに笑った。頬をほんのりと紅く染めた少女は、まさに美少女と言わなければならない顔立ちをしている。

「見てたんなら声掛けろよ。恥ずかしい」

遅れて到着した足音は、群青色の少年のものだった。慣れた手つきで道化師の面を外す。

「同じ顔!？」

「……なんだよ」

面の下から現れたのは、シエルと瓜二つの顔だった。多少こちらの方がつり目である。

「ノエルとシエルは一卵性双生児なんだ」

「そーゆーこと。アル、こいつ誰？」

初対面のゼルに対して、ノエルは警戒心を露にする。そんな彼をなだめるように、アルは新たな仲間だと説明した。アルがゼルに気を許しているからか、ノエルも警戒心を解く。小さな双子はそれぞれ改めて自己紹介をした。

「ねー、フェリクスはー？」

シエルは小首を傾げて尋ねる。端整な顔に、なんとも可愛い仕草である。

「ベアトリスの捕獲」

「どーせいつもの所だろ」

後ろで両手を組みながら、ノエルは街の方へと目を遣る。海岸線に築かれた街は勾配に沿って、高台を白く染めていた。

「さっきから捕獲捕獲言ってるけど、珍獣か何かなのか？」

今まで話を聞いているだけだったゼルが、疑問に思っていたことを口にする。途端に、『ベアトリス』を知る三人は声を上げて笑った。ノエルに至っては、呼吸をするのも苦しそうに、腹を抱えている。

「確かに珍獣には違いないよな」

目尻の涙を拭いながら、アルは呼吸を整える。よほど可笑しかったのか、ノエルはヒイヒイ言いながら笑っていた。

「ま、行けばわかるよ☆」

にっと笑ったアルを先頭に、一行はフェリクスとベアトリスとやらがいるであろう場所に向かう。

ゼルにとっては、質問したことで更に『ベアトリス』への謎が深まっただけだった。

（勘違いから始まった）（10）

海岸線を離れ、街中へ足を踏み入れる。傾斜のある道のお陰で、普段よりも足腰への負担は大きい。石畳の敷かれた緩やかな坂道を、フェリクスは淡々と歩いていった。夕暮れ時であるからか、街は美味しそうな匂いに包まれている。

似たり寄ったりな白い石造りの建物の中から、彼は迷うことなく一軒のドアを開いた。木製のドアにぶら下がった大きなベルがカランと鳴る。入り口の頭上には年季の入った、酒樽の形をした看板が堂々と掲げられていた。

「らっしゃい！」

どこからか歓迎の声が聞こえるが、たちまち周囲の喧騒にかき消されていく。店内には屈強な男達が集い、武勇伝に話を咲かせていた。

フェリクスはそんな彼らには目もくれず、真っ直ぐカウンターを目指した。不規則に置かれた丸テーブルの間を早足で抜ける。

「おうネエちゃん！こっちで一緒に呑まねえかい？」

カウンターまであと一步というところで、何者かが肩を掴んだ。

「お断りします」

「つれねえこと言うなよー。独りなんだろ？俺達と愉しくやろうや」

きっぱりと断ったにも関わらず、男は更に肩を抱いてきた。酒臭

息が頬に掛かり、フェリクスの眉間にシワが寄る。そんなことには気付かずに、男はフェリクスの肩を抱き寄せ、強引に席へと誘導しようとしていた。周囲の人間も展開が気になるのか、面白そうに眺めているだけである。

痺れを切らしたのか、フェリクスは金のロッドを高く掲げた。そして勢いよく床に突き立てると、己に回された男の腕を捻り上げていた。予想外の反撃に、男の口からはくぐもった声が漏れる。

「私は男ですが、何か？」

満面の笑みでフェリクスはそう言い捨てた。そのまま周囲を見回せば、凍りついた空気は何人もが即座に顔を逸らした。捻りあげた男を解放してやれば、彼は一目散に仲間のもとへ逃げ帰っていく。

「あらフェリクスじゃない。何やってんの？」

静まり返った店内に、凜とした声が響く。フェリクスはやれやれとため息を吐くと、身を翻してカウンターの端へ向かった。

「それはこっちの台詞ですよ、ベアトリス」

褐色の肌の女と目が合った。緩くウェーブのかかった紫色の長い髪は、高い位置でひとつに括られている。髪と同じ色をした瞳は、面白そうに彼を見つめていた。胸元と肩だけを覆う鎧に鉄製の小手、かなり短めのショートパンツに腰布を巻き、黒のニーハイブーツを纏った長い足を組み換える。露出度の高い彼女は、重たいのか溢れんばかりの胸をカウンターに乗せていた。

「あなたって人は……また昼間から呑んでたんですか？」

呆れたように言うフェリクスに、ベアトリスは歯を見せて笑った。尖った耳と人より少しだけ大きめの犬歯は、幻惑の森に棲むと云うエルヴァ族のそれだった。

「酒代くらい自分で稼ぐわよおー」

「そういう問題じゃありません」

ひどく上機嫌なベアトリスは、グラスに入った赤ワインの最後の一口を飲み干した。満足そうに一息つく彼女を横目に、フェリクスはマスターの姿を捜す。カウンターの中に目を向ければ、困ったように微笑む彼と目が合った。

見ればベアトリスの周囲には、空になった酒瓶や樽が散乱している。恐らく店の裏手にある酒蔵の中身も、いくつか空にしてしまっているに違いなかった。

彼女にも聞こえるように吐いてやった大きなため息は、本人には全く聞こえておらず、ベアトリスは新たな一杯をグラスに注ぎこうとしていた。

「帰りますよ」

途端に彼女の手が止まる。ブリキのような効果音が付きそうなほどに、ベアトリスはゆっくりと彼を仰ぎ見た。長身なフェリクスを、座ったまま下から見ているからだろうか。彼の目がいつもより細く見える。

「アル達も来るんでしょう？ だったらまだいいじゃない」

「あなたは馬鹿ですか？ 子供達をこんな場所に入れさせる訳にはいかないでしょう？」

自分はこの笑顔を知っている。例え満面の笑みで優しく語りかけてはいても、目だけは笑ってはいないのだ。こんな時の彼には逆らわない方が得策である。ベアトリスは身をもって体験していた。

「マスター、お釣りはいらわないわ。ごちそうさま」

懷から取り出した麻の袋をカウンターに置く。ずしりと重たい音を立てて、それは彼女の手を離れていった。

「さあ、帰りましょう」

先を歩くフェリクスの背中を恨めしそうに見つめながら、ベアトリスは彼と共に宿屋へ向かうことにした。

（勘違いから始まった）（11）

狭い路地を抜け、裏口のようなドアから中へ入る。夫婦でひっそりと営む宿屋は、その立地からか旧王国民御用達となっていた。夫婦もあえて客の事情に首を突っ込むことなく、快く出迎えてくれる。今回も例に漏れず、宿屋へ帰宅したアル達一行を温かく迎えてくれた。

「「おばちゃん、お腹空いたあ」」

「ちよいとお待ちよ。先に手を洗っというで」

双子特有のシンクロ発言に、女将は我が子を見守るような眼差しを向けていた。実際夫婦に子供はおらず、もしかしたらノエルとシエルをそれと重ね合わせているのかもしれない。

こじんまりとした食堂に足を踏み入れれば、湯気の立ち上る温かい食卓が目の前に広がっていた。立ち込める美味しそうな匂いが食欲をそそる。

「「いったただっきまーす！」」

厨房の一切を取り仕切る旦那の手料理は、薄すぎず濃すぎずの味付けで、その力強い手からは想像できないほど繊細に盛りつけられていた。

新鮮な魚介類に舌鼓を打ちつつ、一行は黙々と箸を進める。

「そうそう、今日は珍しいお酒が手に入ったんだよ」

そう言って女将は、奥から一つの箱を持ってきた。上等な桐の箱は朱色の紐で結ばれ、ミミズののたくったような文字が墨で書かれていた。小気味良い音を立てて一升瓶の蓋を開けると、ぷんとアルコールの匂いが広がる。

女将は慎重に酒をグラスに注いだ。透明な液体の中に、小さな金粉が無数に煌めく。灯りを反射して、それはキラキラと優雅に輝いていた。

「きれー」

零れたシエルの声を聞きながら、ゼルはグラスを口へ運ぶ。焼けるような喉ごしと滑らかな舌触りに、思わず感嘆の声を漏らした。そんな彼の反応に、女将は至極満足そうに微笑んでいた。

「呑んでみる？」

そう言って、まだ金粉が舞うグラスをアルに差し出す。しかし彼は、首を横に振った。

「俺まだ19。みせーねん」

「あ、やっぱり？」

予想通りの言葉に、ゼルは苦笑いした。大人びてはいても、ふとした瞬間にあどけなさの残る表情を見せる彼に、薄々そうなのだろうとは感じていたのだ。

「ゼルは何歳なのー？」

「俺？24だけど」

シエルの質問に端的に答えてやると、ゼルはアルに拒絶されたグラスに口をつけた。

「ベアトリスと一緒だねー」

「自称だけどな」

「だーれが自称だって？」

笑い声の中突如響いた女の声に、一瞬むせそうになる。なんとか口にふくんだ酒を飲み干すと、ゼルは恐る恐る声のした方へ振り向いた。視線の先には、やたら露出度の高い女が仁王立ちしていた。

「あ、あんた……!!」

「あらーあの時の坊やじゃない。久しぶり☆」

「顔見知りですか？」

驚く周囲をよそに、ベアトリスはゼルの肩を叩きながら女将に酒を注文する。

聞けば、酒代の為に賞金稼ぎをやっているベアトリスと数カ月前に仕事をしたのだと云う。その時はお互い名も名乗らなかったため、ベアトリスの名を聞いてもピンと来なかったのである。

「まさかあんたが仲間になるとはねー。よくアルが許したもんだわ」

「アルが誘ったんですよ」

フェリクス言葉に、ベアトリスは目を見開いた。そうしてアルの顔をちらと見遣ると、彼女は酒を煽りながら豪快に笑った。

ベアトリスのために運ばれてきた安い酒樽は、彼女に付き合わされているゼルと二人ですでに半分ほど空になってしまった。

いつの間にか、アルと双子達は部屋に戻ったらしい。食堂には成人組だけが残っていた。

「そろそろ休みましょう。明日も早いですからね」

フェリクスの一言で、その場はお開きになる。しかしベアトリスだけが、まだ付き合えと彼のローブを掴んでいた。機嫌が良いのか、彼女は満面の笑みを浮かべている。

「ご、ごちそうさまでしたー」

触らぬ神に祟りなし。ゼルは二人を置いてそそくさと食堂を後にした。閉めたドアの向こうからは、昼間からどーだの迎えがこーだのとフェリクスのお説教が聞こえてくる。

苦笑しながら二階への階段を登り、割り当てられた客室へ向かう。鍵を開けドアを開ければ、室内は明るかった。先に休んでいると思っていた同室のアルは、中央に置かれたテーブルに腰かけている。

「お前、何食ってんの？」

問いかけられた彼の肩が小さく跳ねる。テーブルの上には、生クリームに乗った大きなプリンが堂々と居座っていた。

「な、何だよ！男が甘いもの食べてちゃダメなのかよ！」

恥ずかしさからか頬を染めたアルは、覗き込んできたゼルにむきになる。しかし柄の長いスプーンを手に頬を染められては、ゼルの目にはなんとも可愛らしく映ってしまう。

「いや？俺も甘いのが好きだし。一口ちよーだい」

そう言って彼はスプーンを握るアルの手に自らの手を重ねると、ちよこんと乗ったプリンを平らげた。

「それ食ったら寝ろよー」

黒の上着を脱ぎ捨てながら、ゼルは大きな欠伸をする。

「……い、いるなら自分の頼めばいいだろ!!」

顔を真っ赤にしたアルの叫びを聞きながら、ゼルは二つ並んだベツドの一つに潜り込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3914z/>

天空の姫君

2012年1月11日10時48分発行